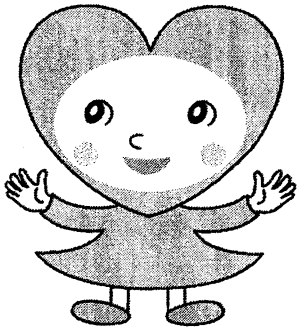
令和２年度

第3次能美市地域福祉活動計画[3年目]

評価委員会報告



地域福祉推進のマスコット

のみんちゃん

社会福祉法人能美市社会福祉協議会

令和２年度　第３次能美市地域福祉活動計画評価委員会報告

開催日時：令和３年３月２６日（木）午前９時３０分～１１時００分
開催場所：能美市ふれあいプラザ　２階　第１会議室
出席者：

高塚　亮三	評価委員会	委員長	
西川　方敏	〃	副委員長	
吉田　　良	評価委員会	委員	
高田　　茂	〃	委員	
栗山　よしみ	〃	委員	（こころに寄り添い合う人づくり委員会　委員長）
津田　康則	〃	委員	（　〃　副委員長）
中山　　勇	〃	委員	（　〃　副委員長）
藤田　珠美	〃	委員	（見守り・助け合い推進委員会　委員長）
木戸　幸平	〃	委員	（　〃　副委員長）
冨田　静香	〃	委員	（　〃　副委員長）

以上　１０名（敬称略）

１．評価の方法

地域福祉活動計画の一年間の活動成果を報告する場である「春まちぽかぽかプロジェクト（春ぽか）」は、昨年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、開催直前に急遽中止となりましたが、本年度は、感染防止対策に十分配慮して、リモート会議形式も導入しながら、令和３年２月２１日～２８日の間、規模を縮小し実施しました。参加人数も制限しての開催でしたが、２委員会の報告会や、最終プログラムの地域福祉のつどいで、今できる精いっぱいの「活動の見える化」ができました。

評価委員会には、２委員会から最終報告が提出され、それぞれの「自己評価」について意見交換を行いました。２委員会は相互に現状を理解し、取り組みで見えてきた課題を再確認して、第３次活動計画の３年目の総合評価としました。

２．報告について

令和３年度に開催される市社会福祉協議会の理事会（６月３日（木））・評議員会（６月２４日（木））へ評価委員会の評価を報告します。（評価の公表は、３年目：令和２年度と５年目：令和４年度の活動終了時に行うことになっていましたが、３次活動計画が令和３年度（４年目）を以て完了することとなりましたので、令和３年度の活動終了時の報告を以て３次活動計画は終了する予定です。）

令和３年３月３１日

令和２年度の取り組み及び
第３次能美市地域福祉活動計画３年目の取り組みについての報告

第３次能美市地域福祉活動計画評価委員会
委員長　　高　塚　亮　三

第３次能美市地域福祉活動計画の３年目の取り組みは、令和３年３月２６日に開催しました評価委員会をもって、全ての日程を終了いたしました。ここに評価委員会より報告いたします。

第３次計画は、第２次計画の成果と課題を受けて、さらなる地域福祉の充実を図るため組織された「こころに寄り添い合う人づくり委員会」、「見守り・助け合い推進委員会」の２つの委員会で、「助けたり、助けられたりの地域づくり」に必要な人材と仕組みについて話し合ってきました。特に地域に住む誰もがそれぞれに役割を持ち、支え合いながら暮らすことができるように、地域ぐるみで人を育てる「意識づくり」と「仕組みづくり」に取り組みました。第３次計画３年目として下記の点を確認しました。

◆ 人づくり委員会では、障がいに対する理解を深め、共生について考え、地域ぐるみで人を育てるという意識づくりを進めた。そのために、①障がいのある子どもを持つ母親の思いや精神に障がいのある当事者の思いを聞く。②放課後児童学童クラブ等に、人権啓発 DVD『桃色のクレヨン』の鑑賞を呼びかけることで、“こころに寄り添い合う”ということや、“思いやりの心の大切さ”を学ぶ機会とした。
　また、「フードドライブ」の活動にも関心を持ち、生活困窮の方への地域での見守りや寄り添い方等について理解を深めた。
活動から見えてきた課題：①相手のことを思い、気持ちに寄り添った関わり方を考える機会づくりがもっと必要。②障がいについて考える機会も継続的に必要。
今後の進め方：学びと実践の繰り返しが大切であり、今後も継続的に当事者の思いに触れる内容の人づくり講座の開催を必要とする。

◆ 見守り委員会では、コロナ禍により地域での見守り・助け合い活動に制約が生じた結果、新たに見えてきた課題や、中断を余儀なくされている地域のいきいきサロンの再開に向けての動きなど、それぞれの町会の取り組みの経過や工夫を知り合う機会を設け、住民啓発を進めてきた。
活動から見えてきた課題：住民同士のつながりが希薄化する中、①引きこもり、孤立、ゴミ出し等の地域ニーズを拾い上げていく仕組み作りが必要。②それらを自分達の問題であると捉え、住民が関わっていく仕組み作りが必要である。
今後の進め方：①地域福祉委員会活動として、スマートフォンの LINE アプリでの見守り情報の共有など、コロナ禍でもつながり合える新しい仕組みを進め、助け合い活動へとつなげる。

◆人権啓発DVD『桃色のクレヨン』は「ナラティヴ・アプローチ」（注）と呼ばれている手法で、主人公の心理状態を「どうして、どうして」と問い掛け、見付けていく手法です。この手法は小さい子供に適していますが、人生経験を積むと、自分なりの解釈で課題を処理してしまい、深く立ち入ることは難しくなるかもしれません。従って多くの人にとっては無関心を装うことになります。河合隼雄は「生きるとは、自分の物語をつくること」と言っています。意識することは少ないかもしれませんが、私達はああでもない、こうでもないと考えつつ自分の物語を作っています。共生社会を構築するためには、近くに住んでいる、困難に直面している他者に対しても、支援のための時間を割き、その際時間が掛かり過ぎる案件については公共機関につなげられる仕組みが用意されている必要があります。

（注）「ナラティヴ・アプローチ」とは人々の語りや物語に注目し、その語りを通して話題としている現象に迫る実践方法です。現実は必ずしも客観や本質によるものではなく、人々の間で言葉を介して変わり得るものであると考えられています。従ってナラティヴ・アプローチでは話し合う人の立場に上下関係はなく、お互いが語る物語に耳を傾け合いながら、当事者にとってのその人らしさを一緒に見付けていきます。

◆「共生社会」とは誰もが権利の主体であり、自己選択、自己決定、社会参加が保障される社会でなければなりません。ところが、コロナ禍でふれあい福祉交流会も中止され、民生委員・児童委員は殆ど障がいのある人と出会える機会もなくなり、対面で触れ合う機会が制限され、障がいのある人も権利を主張する機会が奪われている状況です。感染防止を図るためにはフィジカルディスタンスを保たねばなりません。またマスクを着けていると聴覚障がい者はコミュニケーションの手段を制限されてしまいます。このようにパンデミック（世界的大流行）は個人個人の身体ばかりか、社会そのものを危機に陥れていることに対しても目を向ける必要があります。（このような時に後で述べるイネーブルウェアでコミュニケーションが取れれば、聴覚障がい者も疎外されることはなくなるはずです）

◆今年の「春ぽか」は「ふじゆう(不自由)でも、くふう(工夫)で、しあわ(幸)せ」がテーマとなりました。工夫しながら、人とのつながりを切らないようにしていくことが大切です。それがコロナ禍の最中であっても、聖火がオリンピックの続く限りリレーされるように、福祉の“火”も絶えることなくリレーされ続けなければなりません。

◆行政は障がいのある人を支援するために法律や制度を設けています。しかし、それを運用する段階になると、使い勝手が悪かったり、利用者に却って思いがけない負担を掛けることになったりします。運用に当たっては、現場の声が反映されるような臨機応変な仕組みが望まれます。（後に述べられる市福祉計画との連動で制度運営の改善を円滑にすることが期待されます。）

◆「障がい者の理解」のためには根気強く活動を継続していくことが大切です。障がいのある人の存在は身近であるべきなのに、現状は身近とは言い難い状況です。地域で障がいのある人の顔が見えないと言われます。例えば、障がいのある当事者が地域の中で活躍できる役割を担って、どんどん地域に参加する機会を整えれば、身近な存在になるはずです。障がいのある当事者自身は積極的に地域に出向くことが必要ですし、地域の方々のボランティアへの参加で双方の距離が縮まるはずです。また、多くの代弁者がサポーターになって、当事者にエールを送ることもできます。

◆これまで、障がいのある人は「心ある」人達に支えられてきました。誰が「心ある人」であるのか、そんな人は何処にいるのか、障がいのある人にはほんの一部の人のことしか伝わっていません。しかし、障がいがあってもなくても地域のボランティア活動に参加すれば、直ぐに顔見知りになれるはずです。「心ある」人達は積極的にボランティアを行っています。

◆今年度も新たな課題が浮き彫りになりました。特にコロナ禍の中で、在日外国人や一人親家庭、障がいのある方々と言った人達の中に、生活に困っておられる方がいらっしゃることが分かってきました。このような方々にアクセスでき、援助できる仕組みを充実させる必要があります。

◆その一方でフードドライブに参加した高校生が家族に相談し、家庭で見付けた食品を寄付した実践例もありました。高校生であっても、能美市に暮らす住民としてボランティアに参加し、自ら自分たちの地域を住み易くする責任を見付けています。このような実践を通じた福祉教育にも積極的に取り組む必要があります。

◆現在、新型コロナ感染拡大のただ中です。これは大災害です。死者も多く出ています。このような大災害にも怯むことなく地域福祉活動を推進する必要があります。この「福祉の輪」は、次世代にしっかりとバトン・タッチされなければなりません。『ＳＤＧｓ』の３番目のターゲットとして「すべての人に健康と福祉を」に取り組まなければなりません。

◆新型ウイルス感染拡大を阻止するために行っている『新しい生活様式』が、他方においては人間関係の希薄化に拍車を駆けています。これを克服しようとＩＣＴ活用のオンライン会議やリモートワーク等の新しい技術の導入をいち早く受け入れているのが若い世代です。高齢者は若い世代の力を借りながら、生涯を全うする時代になってきています。

◆社会福祉協議会が新たに始めたフードドライブの取り組みや、多くの団体等とのネ

ットワークの広がりから見えたことは、地域での単なる見守りだけでなく、更に一歩進んだ一人ひとりの暮らしを支える視点が求められていることです。他方、長年に亘る介護保険制度の改正・充実にみられるように、高齢者に対する福祉の推進が課題でしたが、近年は福祉の対象は多様化し全世代に広がってきています。能美市が新しく市地域福祉計画（以下、市福祉計画）の策定に取り組むに当たり、多くの市民や企業の参加の必要性が見込まれることから、１５年間、一年ずらしてスタートしていた市福祉計画と社会福祉協議会を中心とした地域福祉活動計画（以下、福祉活動計画）を同期させることが妥当であると考えるに至りました。

◆行政の福祉計画と社会福祉協議会を中心とした福祉活動計画を同期させることは単なるテクニカルな問題ではありません。これは「ＳＤＧｓ」に取り組む際の根本の課題と捉える必要があります。「ＳＤＧｓ」では経済、社会、環境、教育などのあらゆる分野とインクルーシブに向き合い、誰一人取り残されない「共生社会」を構築しようとしています。「インクルーシブに向き合う」とは「包摂的に向き合う」と言うことです。「包摂的に向き合う」ためには、特定な個人を想定し、対象とした向き合い方ではなく、どのような立場にあっても、誰もが生きる際に感じている困難さを居合わせた人同士で和らげ合い、仲間外れを出さない仕組みを考えることです。市福祉計画と福祉活動計画がリアルタイムに連動して運営されれば「公」の確かさに、「民間」の臨機応変さが相まって円滑な社会運営ができることが期待されます。

◆昨年１２月４日に市福祉計画を担当する市健康福祉部福祉課と福祉活動計画を推進している「こころ豊かな地域づくりの会」と「評価委員会」及び社会福祉協議会のメンバーとで第４次福祉活動計画の策定に向けての打ち合わせ会が持たれました。市福祉課から市福祉計画評価委員会での「市福祉計画の理念と、社会福祉協議会を中心とした福祉の実践活動とが連動することが必要」との意見を受け、更には共生社会の構築にむけ重層的な支援体制の構築が必要であることからも、令和４年度にスタートする第４次市福祉計画と第４次福祉活動計画を同期させたい旨の提案がありました。
（先に述べた第３次福祉活動計画の３年目の評価においても、その端々に市福祉計画と福祉活動計画の連動の必要性が見られました。）

当初計画では第３次福祉活動計画は令和４年度まで続き、第４次福祉活動計画は令和５年度からの開始予定でした。第４次市福祉計画と第４次福祉活動計画を同期させることにより、理念と実践を合わせて示すことに協力して頂きたいとの市福祉課から提案があり福祉活動計画側も了承することになりました。形式的には先ず市福

祉計画の理念が示され、次に福祉活動計画が策定されるのか、全く同時進行で策定されるのかは明確になっていませんが、１年の間隔が生じることはなくなりました。市福祉計画で理念が示され、それに沿った体制づくりも始まるはずです。その理念、体制に沿った福祉活動計画を策定することになりますが、実践は個人単位でも地域（町会、町内会）単位でも各機関単位でも夫々に開始するはずです。

今はコロナ禍の中にあり、「新しい生活様式」の下で生活しています。ソーシャルディスタンス（社会的距離）を保つことを心掛けていますが、ソーシャルディスタンスに孤立の意味が含まれることから、フィジカルディスタンス（物理的距離）と言い換えるようになってきました。

ウイズコロナの時であっても、アフターコロナになってもフィジカルディスタンスをとっていても、孤立を生むことがないように、ユビキタスネットワーク（どこにいてもコンピュータがあって、いつもネットワークでつながっている技術や環境がある）社会の構築、更には「だれでも」「どこでも」「何にでも」使える、障がい者にこそ必要なイネーブルウェア（さまざまな身体特性にあわせて操作性を調整できる機能）等のＩＣＴ活用も視野に入れた環境整備も市福祉計画の中に盛り込まれていくはずです。

推進する委員会	令和2年度　こころに寄り添い合う人づくり委員会　評価シート						
第3次計画の指標	指標項目	指標数値	H30実績	R元年度	R2年度	R3年度	R4年度
	・地域における「ふれあい行事」の開催数(単年度数)	300回	300回	299回	70回		
	・障がいのある方（その親等）の仲間作りと社会参加を目的とする交流の機会の開催数(単年度数)	30回	25回	34回	27回		
	・子育て支援に関する集いの場の実施回数（単年度数）	140回	136回	145回	235回		
	・地域における福祉体験・共生理解の体験者の延べ人数（単年度数）	5,500人	4,572人	3,765人	2,428人		
第3次計画でめざすこと	◆地域の中で気軽に悩みを相談したり、話し合える場・集いの場づくりを進めます。 ①障がいに対する理解を深める場・機会づくりを進ます。 ②福祉施設と住民が話し合う研修や連携の情報交換の場づくりを進めます。 ③地域ぐるみで子育てを考える場・機会づくりを進めます。 ◆福祉教育の充実に向けての機会づくりを進めます。 ④多様な世代が関わる学びの話し合いの機会づくりを進めます。 ⑤男性が子育てや共生社会に対して理解を深める機会を進めます。 ⑥企業・事業所等が子育てや共生社会に対して理解を深める機会づくりを進めます。 ⑦困窮世帯や孤立世帯への見守りや寄り添いなどの理解を深める機会づくりを進めます。						
第2次計画での課題	◆年々、講座の参加者が増えていることは、関心のある方が増えていることだと感じているが、参加者が民生委員･児童委員や福祉関係者などに固定しており、幅広く市民が参加できるような工夫が必要。また、障がいのある方の心に寄り添うということへの理解を進めることが必要。						
どのように進めてきたか。(3年目)	◆共生に対する理解を深め、地域ぐるみで人を育てるという意識づくりを進めるため、今年度も障がいに関する理解と啓発の活動内容について協議を重ねた。 また、新型コロナウイルスの影響により社協で新たに取り組み始めた「フードドライブ」の活動をきっかけとして、生活困窮の方とつながり、見守りやその方々の寄り添い方等について理解を深めた。 ・令和２年度は、第３次地域福祉活動計画の３年目であり、２年目の成果を確認し、課題に対して協議してきた。 ・共生に対する理解を深め、地域ぐるみで人を育てるという意識づくりを進めるため、今年度も障がいに関する理解と啓発の活動について協議を重ねてきた。 ・障がいのある子どもを持つ母親の思いを聞き、障がいについての理解を深めた。 ・福祉教育の充実に向け、放課後児童学童クラブや、小学校の児童に、人権啓発DVD『桃色のクレヨン』の鑑賞を呼びかけ、障がいの特性を理解し“こころに寄り添い合う”ということや、“思いやりの心の大切さ”を学ぶ機会につなげた。 ・「フードドライブ」の活動にも関心を持ち、生活困窮の方への地域での見守りや寄り添い方等について理解を深めた。 ・春まちぽかぽかプロジェクトにて、「令和２年度こころに寄り添い合う人づくり講座」をオンラインで実施し、精神に障がいのある方々のこれまでの思いを聞き、こころに寄り添い合う意識づくりをすすめた。						
取り組みの中で見えた課題(3年目)	◆障がいのある方もない方も共に地域でその人らしく暮らしていくためには、「こころに寄り添い合う人づくり講座」を実施し、相手のことを思い、気持ちに寄り添った関わり方を考える機会づくりにつなげていく必要がある。参加者が障がいのある方の気持ちに寄り添うことや、思いやりの意識づくりには時間がかかるので、障がいについて考える機会が継続的に必要。						
今後に向けてどう進めるか	◆障がいの特性を理解し、こころに寄り添い合うという意識を広げていくためには、学びと実践のくりかえしが大切であり、今後も継続的に当事者の思いに触れる内容の人づくり講座の開催をすすめる。 ◆障がいへの理解を深めるには、子どもの時から障がいのある方に接して話を聞く事が大事である。正しい知識を得ることが差別や偏見をなくすことへの第一歩なので、学校や学童クラブとも連携し、『桃色のクレヨン』のDVDを活用し啓発活動を継続して行う。 ◆引き続き、「フードドライブ」の活動に関心を持ち、生活困窮の方への地域での見守りや寄り添い方等について理解を深める。						

第3次計画を推進する委員会	令和2年度　　こころに寄り添い合う人づくり委員会　経過シート	
★第3次計画でめざすこと	◆地域の中で気軽に悩みを相談したり、話し合える場・集いの場づくりを進めます。 ①障がいに対する理解を深める場・機会づくりを進めます。 ②福祉施設と住民が話し合う研修や連携の情報交換の場づくりを進めます。 ③地域ぐるみで子育てを考える場・機会づくりを進めます。	◆福祉教育の充実に向けての機会づくりを進めます。 ④多様な世代が関わる学びの話し合いの機会づくりを進めます。 ⑤男性が子育てや共生社会に対して理解を深める機会を進めます。 ⑥企業・事業所等が子育てや共生社会にたいして理解を深める機会づくりを進めます。 ⑦困窮世帯や孤立世帯への見守りや寄り添いなどの理解を深める機会づくりを進めます。

実践活動内容（どんな事を話し合い、行ったか）		
	第1回会合(6/26)	1）委員紹介、自己紹介 2）委員長・副委員長の選出（栗山委員長・津田副委員長・中山副委員長に決定） 3）第3次活動計画2年目の取り組みについて振り返り 4）今年度の協議の方向性及び年間開催予定（頻度）について検討 ・毎月1回の開催頻度とし、障がいの理解を深める取り組みと、新型コロナウイルスの関係により社協で新たな取り組みを始めたフードドライブの活動をきっかけとして、生活困窮の方への見守り支援や寄り添い方等の地域課題を協議する場とすることに全委員の了承を得る。
	第2回会合(7/15)	1）フードドライブについての現況報告 2）広島県手をつなぐ育成会　あび隊の活動について情報共有・・・障がいの理解講座を行うあび隊の活動について、今後内容について人づくり委員でも確認していく。 3）委員全員の障がいへの思いについて共有を諮る。
	第3回会合(8/26)	1）のみフードドライブ連絡会立ち上げについて報告　フードドライブ9/26.27開催を周知した。 2）今年度は新型コロナウイルス禍の影響により、施設訪問や『でこぼサロン』の実施は困難な為、人づくり委員会としての勉強会や、研修会を中心に開催することを確認した。次回『桃色のクレヨン』のDVDを鑑賞し、意見交換につなげる。
	第4回会合(9/29)	1）フードドライブ（9/26.27）実施状況について報告 2）『桃色のクレヨン』のDVDの鑑賞と意見交換 3）今後の実施内容の確認 ※ 次回は、身体障がいを抱える家族の思いについて勉強会を行う （講師：持田　聖子　氏）
	第5回会合(10/23)	1）ぼくらの街フェスについて確認した。今年度は、コロナ禍の影響で、障害者週間に合わせ12/1～12/13は市役所にて作品展示等を実施し、12/12.13は総合文化会館にて作品展示を予定していることを受け、人づくり委員会としてもPR活動としてパネル展示を行うことで委員全員了承を得る。 2）『桃色のクレヨン』のDVDについては、11月児童館館長会にて周知し、冬休みの期間に児童にDVDを鑑賞してもらえるよう調整を図る。児童に障がいの有無に関係なく、皆が同じ時を生き、同じ地域に暮らす者同士であることを理解していただき、 障がいの特性を理解し“こころに寄り添い合う”ということや“思いやりの心の大切さ”を学ぶ機会につなげる。 3）委員同士の勉強会の機会として、身体障がいと知的障がいの子を抱える母親の思いについて、持田聖子氏に委員会へ来ていただき、お話を聴き、障がいについての理解を深めた。 4）次回は、民生委員児童委員協議会障がい者福祉部会と人づくり員会と合同研修会を開催し、自閉症の子を抱える家族の思いを聞き、地域でできることを一緒に考えていただけるような内容で調整していく。
	第6回会合(11/27)	1）市民生委員児童委員協議会障がい者福祉部会との合同研修会 『自閉症の子を持つ親の思い』　　講 師：高崎　優子 氏　　参加者：計39名 2）反省会 3）春まちぽかぽかプロジェクトについて協議 能美地域活動センターはまかぜの当事者の思いを発信していただく内容で決定⇒3密対策としてZOOMを利用で調整する
	第7回会合(12/21)	1）フードドライブ（12/12・13）報告 障がい者週間記念事業（12/12.13）にて、人づくり委員会のPR作品展示を実施 2）『桃色のクレヨ』ンDVDにおける障がいへの理解啓発について…浜小学校2クラスが視聴し障がいへの理解を深めた辰口中央学童の児童が、1/6(水)に視聴 3）春まちぽかぽかプロジェクトプログラム内容について確認　　日時：令和3年2月23日(火・祝)
	第8回会合(1/20)	春まちぽかぽかプロジェクト　こころに寄り添い合う人づくり講座の内容について、最終確認
	第9回会合(2/23)	春まちぽかぽかプロジェクト　日時：令和3年2月23日(火・祝)10：30～12：00 障がいを知る・学ぶ令和2年度こころに寄り添い合う人づくり講座　（ZOOM配信） 精神に障がいのある方からのメッセージ『わかってほしい！！』実施　　参加者：計31名
	第10回会合(3/4)	1）春まちぽかぽかプロジェクトこころに寄り添い合う人づくり講座についての反省と、一年間の取り組みの振り返り 2）今後に向けての内容の確認

推進する委員会	令和2年度　見守り・助け合い推進委員会　評価シート

第3次計画の指標

指標項目	指標数値	H30実績	R1実績	R2実績	R3実績	R4実績
・地域福祉委員会の実施回数（単年度数）	950回	688回	632回	464回	回	回
・いきいきｻﾛﾝ・地域ｶﾌｪ、公民館開放等の実施回数（単年度数）	1,580回	1,203回	2,003回	1,153回	回	回
・地域福祉委員会ヒント探し講座【入門編】修了者数（地域福祉委員会活動推進員登録者数）（累計数）	400人	311人	338人	363人	人	人
・地域福祉委員会と連携をとる地域内の「生活支援の助け合いグループ」把握団体数（累計数）	12団体	8団体	12団体	15団体	団体	団体
・ボランティア登録人数（単年度数）	5,000人	3,953人	3,834人	3,575人	人	人
・ボランティア登録団体数（単年度数）	100団体	97団体	100団体	97団体	団体	団体

第3次計画でめざすこと

◆地域の中で気軽に悩みを相談したり、話し合える場・集いの場づくりを進めます。
①地域福祉委員会における地域ぐるみの見守り・助け合い活動の活性化を進めます。
・認知症・権利擁護・虐待・生活困窮・社会的孤立・住宅問題
・就労問題等多様な問題やその対応を学び、解決に向けて取り組むことを進めます。また、自主防災組織との連携などを進めます。
②福祉施設・企業・商店等も含む地域ぐるみの見守り・助け合いの連携を進めます。
③地域住民ができる生活支援に関する助け合い活動の拡充を進めます。

◆多様な人材がボランティアや助け合い活動に関わることを進めます。
④地域における助け合いの担い手や理解者の拡充を進めます。

2次計画での課題

◆地域での見守り・助け合い活動に関しては温度差があり、進んでいる町会と進んでいない町会の差がある。進んでいない町会に対しての更なる啓発や意識づけが必要である。

◆少子高齢化が進み、また、世帯構成においても核家族化が進むため、高齢者世帯や高齢者単身世帯が増加する事に伴い、社会的孤立が懸念される。今後は複合的に様々な課題を地域から拾い上げていく必要がある。また、専門職が地域とどう関わるのか、その仕組みも必要である。

◆地域やサービス事業者等が連携することで地域の中の施設が果たす役割・貢献を考える研修や実践が必要である。また、サービスだけでは困難なことも、地域資源と本人（希望や課題）をつなげることが必要である。

どのように進めてきたか。（3年目）

①コロナ禍により地域での見守り・助け合い活動が大きく変化し、住民同士がふれあうことが難しくなっていることを確認し、まず地域の状況を把握するために当委員会と能美市社会福祉協議会が協力し「地域福祉委員会活動についてのアンケート調査」を実施した。その結果を参考に、地域での新しい見守りや助け合いの方法や、つながるための工夫について協議してきた。
②人が集うことが難しい中で地域の声を拾い、見守り・助け合いの活動や、いきいきサロンの再開に向けて動き出そうとしている町会の経過を追い、コロナ禍での活動事例として住民に周知していくために協議を進めてきた。

取り組みの中で見えた課題（3年目）

①コロナ禍で直接ふれあうことが難しい中、つながることの大切さを確認し、新しい見守りの方法や、会えなくてもつながり合える工夫や、何ができるのかを考える必要がある。そのために、各町の困りごとや地域ニーズなどの状況を把握し、それぞれの町にあった見守りや助け合いのしくみを考えるために情報を共有する機会が必要。
②住民同士のつながりの希薄化、引きこもりや孤立、ゴミ問題等、様々な地域ニーズを拾い上げていく必要がある。また、生活環境や就業等により、役員やボランティア等の担い手不足が問題になっているため、住民同士の助け合いの意識啓発を図ると同時に、より多くの住民が自分達の問題であると捉え、どのように関わっていくのか考えてもらうことが必要。

今後に向けてどう進めるか

①各地域福祉委員会におけるコロナ禍での新しい取り組みについて進捗状況を可視化していくと同時に、市内での見守り・助け合い活動の取り組み等の事例を紹介し、それぞれの町に合った活動のあり方について考える機会をつくることが大切だと確認した。
②地域福祉委員会活動として、スマートフォンのラインアプリでの見守り情報の共有をしている九谷町の事例を基に、これからの見守る側、見守られる側の新しいつながりとして広めていく。ふれあうことが難しい中でもつながり合える新しいしくみづくりをすすめ、そして助け合い活動へとつなげていく。
また、地域で多様な人材が関りをもてるよう、地域福祉委員会活動「ヒント探し講座」への参加を進めるなど、担い手を増やすための方策を検討していく必要があると確認した。

第3次計画を推進する委員会	令和2年度　見守り・助け合い推進委員会 経過シート	
★第3次計画でめざすこと	◆地域の中で気軽に悩みを相談したり、話し合える場・集いの場づくりを進めます。 ①地域福祉委員会における地域ぐるみの見守り・助け合い活動の活性化を進めます。 ・認知症・権利擁護・虐待・生活困窮・社会的孤立・住宅問題 ・就労問題等多様な問題やその対応を学び、解決に向けて取り組むことを進めます。また、自主防災組織との連携などを進めます。 ②福祉施設・企業・商店等も含む地域ぐるみの見守り・助け合いの連携を進めます。 ③地域住民ができる生活支援に関する助け合い活動の拡充を進めます。	◆多様な人材がボランティアや助け合い活動に関わることを進めます。 ④地域における助け合いの担い手や理解者の拡充を進めます。

実践活動内容（どんな事を話し合い、行ったか）		
	第1回会合(6/26)	1）委員紹介、自己紹介 2）委員長・副委員長の選出（藤田委員長・木戸副委員長・冨田副委員長に決定） 3）これまでの3次計画の1・2年目の取り組みについて 4）今年度の協議の方向性及び年間開催予定（頻度）について 毎月1回開催（90分）とし、地域の状況にあわせた支援や、推進のために必要な具体的な取り組みについて協議を行う
	第2回会合(7/22)	1）第1回こころ豊かな地域づくりの会の報告 ・・・今年度の取り組みスケジュールについての検討と確認 2）見守り・助け合い推進委員会の方向性についての確認 令和元年度、中止となった「）春まちぽかぽかプロジェクト」のプログラムと、コロナ禍での見守り・助け合い活動について協議していく 3）コロナ禍での地域福祉委員会活動についての意見交換
	第3回会合(8/27)	1）地域福祉委員会活動連絡会の報告　・・・Withコロナでの地域活動について 九谷町でのライングループにより見守り活動・泉台町の訪問活動・徳久町のコロナ禍でのサロン開催 生活支援の貸出車両「つなぐ号」について説明 2）グループワーク　・・・3グループに分かれて地域の支え合い・助け合い活動について意見交換・協議
	第4回会合(9/24)	1）前回グループワークの確認とコロナ禍の中での地域活動について 2）地域福祉委員会活動についてのアンケート調査実施にむけて、意見交換、内容確認 3）各地区の活動について経過確認（福岡町のいきいきサロンの再開について確認）
	第5回会合(10/21)	1）地域福祉委員会活動についてのアンケート調査結果報告 2）各地区の地域福祉委員会活動について情報交換、福岡町いきいきサロンの再開の様子について報告(前田・清見委員) 3）春まちぽかぽかプロジェクトにおける見守り・助け合い推進委員会の報告の機会についての検討 参加人数、構成(グループワーク)、事例紹介の地域、講師(昨年度依頼の井岡氏ですすめる)、日程と大まかな内容について検討。
	第6回会合(11/19)	1）第2回こころ豊かな地域づくりの会の報告 ・・・コロナ禍で、中止にならないためにどのような方法で開催するのかついての検討と確認 2）春まちぽかぽかプロジェクトにおける見守り・助け合い推進委員会の報告の機会についての検討 事例紹介について、佐野町、福岡町を検討 開催方法についてオンラインでの講演を検討、実際にオンライン研修(録画)について体験。
	第7回会合(12/17)	1）春まちぽかぽかプロジェクトにおける見守り・助け合い推進委員会の報告の機会についての検討 タイトル、サブタイトル、内容について意見交換、協議 事例報告について佐野町が辞退。福岡町、泉台町に依頼できないか、アンケート調査の報告と簡単な活動紹介を検討。 講師は井岡氏に決定し、オンラインでの講演に決定。
	第8回会合(1/14)	1）第3回こころ豊かな地域づくりの会の報告 ・・・コロナ禍において、見守り・助け合い活動の重要性を周知・啓発する必要がある事を確認。 2）春まちぽかぽかプロジェクトにおける見守り・助け合い推進委員会の報告の機会についての検討 状況により、規模縮小となった場合でも、委員会の研修会として開催することを全員で確認した。
	第9回会合(2/21)	1）春まちぽかぽかプロジェクトにおける見守り・助け合い推進委員会の報告会 「今できる 地域の見守り・助け合い　～みんなの知恵で新しいつながりを！～」 講師の井岡仁志氏によるオンラインでの基調講演。～つながるためにできること～地域に求められるつながりを切らない取り組み、生活課題を解決する取り組みについて講演いただいた。 地域福祉委員会活動についてのアンケート調査の結果報告(西田委員) 福岡町(前田委員)からはいきいきサロンの開催に至るまで、泉台町からはコロナ禍での見守り活動について、それぞれ事例発表を行った。
	第10回会合(3/4)	1）委員会活動の振り返り及び、今後の見守り・助け合いについての方向性について協議。 春まちぽかぽかプロジェクトのプログラムとして報告会をオンラインという新しい形として開催できたこと、又、コロナ禍でも工夫と、町会の後押しでサロンを開催できた福岡町の事例を紹介したことがよかった。今後も、九谷町のラインアプリでのつながり合いなど、工夫して活動している町会の事例を紹介していくことが大切だと確認し合った。 町（内）会長の参加が少なく残念であった。助け合い活動に関心を持ってもらう、きっかけづくりや工夫が必要であると確認した。

第３次計画の指標について［令和２年度　３年目］

◆ こころに寄り添い合う人づくり委員会

〈R2.3.26 現在〉

指標項目	3次計画当初数値(H29実績)	目標とする数値 H30実績	R元実績	R2実績	R3実績	R4実績	算出根拠 上段は目標値の根拠、下段はR元実績値の根拠
地域における「ふれあい行事」の開催数 ●「ふれあい行事」は地域の既存の行事に福祉の視点を取り入れて頂くもので、地域福祉委員会実績報告で把握します。 (単年度数)	251回	300回に					H26からの4年間で85回増。平均予約9回、今後5年間で9×5=45回増と考え、251+45=296→300 ※目的に合致した新たな住民活動が動き出したときはカウントしていく。
		300回	299回	70回	回	回	地域福祉委員会の実績報告で把握。地域のふれあい行事68回+ﾎﾞﾗﾌｪｽ0+ふれあい福祉交流会0+人づくり講座2回 計70回
障がいのある方(その親等)の仲間作りと社会参加を目的とする交流の機会の開催数 (単年度数)	27回	30回に					障がいを持つ子の母親グループ「きっともっと」が解散したが、別のつどいの可能性を探るとして現状維持 ※目的に合致した新たな住民活動が動き出したときはカウントしていく。
		25回	34回	27回	回	回	福耳ネット10回 +ぬくもりサロン4回 +ゆるにこサロン2回+ふれあい福祉交流会0+西任田ふれあいフェスティバル0+障害者記念事業1+まるにこ親子の広場10回
子育て支援に関する集いの場の開催数	133回	140回に					親子サロン、絵本カフエの地域を会場に広めていくとして微増。 ※目的に合致した新たな住民活動が動き出したときはカウントしていく。
		136回	145回	235回	回	回	親子サロン116回+絵本カフェ0+子育てネット集い事業1+ミニ運動会0+子ども食堂(三道山)72+緑が丘子ども食堂46
地域における福祉体験・共生理解の体験者の延べ人数 (単年度数)	5,114人	5,500人					現状維持 ※目的に合致した新たな住民活動が動き出したときはカウントしていく。
		4,572人	3,765人	2,428人	人	人	学校での福祉体験の体験者延べ2,381人+ジュニボラ体験者数述べ47人

◆ 見守り・助け合い推進委員会

指標項目	3次計画当初数値(H29実績)	目標とする数値 H30実績	R元実績	R2実績	R3実績	R4実績	算出根拠 上段は目標値の根拠、下段はR元実績値の根拠
地域福祉委員会の実施回数 (単年度数)	718回	950回					H29実質79地域福祉委員会平均9.08回開催。これを年12回開催にすると948回→950回
		688回(1～12)	632回(1～12)	464回(1～12)	回(1～12)	回(1～12)	根上地区93+寺井地区132+辰口地区239=464 活動報告書から
いきいきサロン・地域カフェ・公民館開放等の実施回数 (単年度数)	1,215回	1580回					H29実質79地域福祉委員会は平均15.4回実施を年20回(月2回弱)開催に(1580)
		1,203回(1～12)	2,003回(1～12)	1,153回(1～12)	回(1～12)	回(1～12)	根上地区137+寺井地区437+辰口地区579=1,153
地域福祉委員会ヒント探し講座【入門編】修了者数 (地域福祉委員会活動推進員登録者数)(累計数)	271人	400人					10年間平均27人。今後5年間×で25人=125人増と考え、271+125=396→400
		311人	338人	363人	人	人	H25入門編修了者164人+(H26) 36人+(H27)24人+(H28)38人=262人(登録確認249人)+(H29)25人=274人(登録確認271人)+(H30)40人=314人(登録確認311人)+(R1)27人=341人(登録確認338人)+(R2)28人=366人(登録確認363人)
地域福祉委員会と連携をとる地域内の「生活支援助け合いグループ」把握団体数 (累計数)	7団体	12団体					5年間で6団体増。今後5年間で7+5=12
		8団体	12団体	15団体	団体	団体	西二口町ほほえみネット、東レOB支援隊、認定NPO法人えんがわ、松が岡クラブ、九谷町見守り隊、末信町支えあい隊、石子町お世話さん、市商工会女性部、能美子ども食堂ネットワーク、三道山子ども食堂、みんな食堂、NPO法人たすけ愛サロンほっと、粟生リンクの和、オアシスつるしん、下ノ江ささえあい隊
ボランティア登録者数 (単年度数)	3,925人	5,000人					市人口5万人の1割を目指す。 (H30.3.1現在50,132人)
		3,953人	3,834人	3,575人	人	人	
ボランティア登録グループ数 (単年度数)	94団体	100団体					10年で14団体増。今後5年間で1/2と考え94+7=101→100
		97団体	100団体	97団体	団体	団体	R元年度100より 加入4 中止7

※ 指標については、地域福祉の推進や福祉意識の高まりを数値化することが難しいため、表記する2017実績及び、目標とする数値は、「どのように考えるのか」という見方の目安として、参考数値として捉えます。

		H24年度	H25年度	H26年度	H27年度	H28年度	H29年度	H30年度	R元年度	R2年度
■春まちぽかぽかプロジェクト参加者数		927人	1,243人	1,370人	1,261人	1,721人	1,473人	1,828人	0人	185人 (協賛事業を含め746人)
■社会福祉協議会の会員数 (単年度数)	個人会員	4,692人	4,581人	4,361人	4,224人	4,419人	4,344人	4,763人	4,367人	
	団体・企業含	5,050人	4,926人	4,708人	4,557人	4,748人	4,674人	5,092人	4,664人	

令和2年度　第3次能美市地域福祉活動計画の3年目の推進実績

R3.3　能美市社会福祉協議会

		令和2年									令和3年		
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
社会福祉協議会 理事会 評議員会				社協理事会 (6/10) 社協評議員会 (6/29)		第13回能美市民ボランティアフェスティバル（中止）	第16回能美市社会福祉大会 社協理事会評議員会 (9/25)					社協理事会評議員会 (2/26) 春まちぽかぽかプロジェクト2月下旬頃 市内各地で地域福祉に関するプログラムを実施（各委員会の報告の機会）	社協理事会評議員会 (3/23) 令和3年6月社協理事会・評議員会にて評価委員会報告
推進組織	評価委員会 （10名）			委員委嘱と委員長・副委員長の選任　ほか No.1評 (7/20)									No.2評 (3/26)
	こころ豊かな地域づくりの会 理事会 （6名）			理事委嘱と会長・副会長の選任　ほか No.1こ (7/20)			活動計画の連携や調整　ほか	No.2こ (10/26)	活動計画の連携や調整　ほか		No.3こ (1/13)		No.4こ (3/11)
	こころに寄り添い合う人づくり委員会 （15名）	第1回：委嘱状交付、委員長、福委員長の選任　ほか 委員会ごとに開催		No.1 (6/26)	No.2 (7/15)	No.3 (8/26)	No.4 (9/29)	No.5 (10/23)	No.6 (11/27)	No.7 (12/21)	No.8 (1/20)	No.9 (2/23)	No.10 (3/4)
	見守り・助け合い推進委員会 （15名）			No.1 (6/26)	No.2 (7/22)	No.3 (8/27)	No.4 (9/24)	No.5 (10/21)	No.6 (11/19)	No.7 (12/17)	No.8 (1/14)	No.9 (2/21)	No.10 (3/4)